

岡田薫著

『室町時代末期の音韻と表記』

中山 緑朗

一 はじめに

大雑把な時代区分で言えば、平安時代の初めに発生していたと考えられている「イ音便・ウ音便」とともに、「撥音便・促音便」も発生していたと考えられる。しかし、中世において撥音便、促音便が新たに特殊音素として定着したとして、日本語史において必ず触れられる事項の一つでありながら、その実態については必ずしも明らかではない。とくに著者は、室町時代末期、天正・文禄・慶長（一五七三～一六一五）年間に限定して、ほぼ撥音便と促音便の表記に焦点を絞り、ここから当代の音韻に迫ろうとする。本書はそうしたいわば研究の空白を埋めようという意図が基本にある。「音便」とは文字通りに解せば、「発音の便宜のために起った変化」であるが、日

本語の場合、必ずしも体系的な変化ではなく「厳密に音声学的観点から規定された概念ではない」（城生伯太郎他編『音声学基本事典』「音便」二〇一一年 勉誠出版）とする考え方もある。ふつう「音便」として取り上げられるのは、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種である。馬淵和夫氏によれば、イ音便・ウ音便は「ハ行転呼と同様に、文節内におきた法則の変化で、あ

たらしい音韻を生じたものではない」が、ところが撥音便・促音便は、「それぞれあたらしい音韻を生じたものであって、音韻組織上の変化である」（『国語音韻論』一九七一年 笠間書院 八三頁）とする。本書の著者が解明しようとした「音便」とその表記の史の変遷も、新しい音素として登場した撥音便と促音便、とくに促音便とその表記法に焦点が当てられていると言つて過言ではない。本書はローマ字表記と国字本の対比が可能なキリシタン文献を中心に据えて、できるだけ資料の書き手が明確な文献、例えば秀吉の消息などに基

づいて、促音便、撥音便について音韻と表記との関連を実証的に記述しようという野心的な態度で一貫している。

二 本書の構成

本書の構成は、「章」と「節」で見てもと次のようになっている。

第一章 特殊音素の音韻と仮名表記研究の意義

意義

第一節 本研究の目的

第二節 本研究にかかわる先行研究

第二章 キリシタン資料における特殊音素の仮名表記

第一節 キリシタン資料の有効性

第二節 『貴理師端往来』（一五六八年以前成立）における特殊音素の仮名表記

第三節 前期版（一五九一年頃）及び中谷本（筆写年不明）『どちりいなきりしたん』における特殊音素の仮名表記

第四節 後期版（一六〇〇年）『どちりなきりしたん』における特殊音素の仮名表記

第五節 『おらしよの翻訳』（一六〇〇年）における特殊音素の仮名表記

第三章 消息における特殊音素の仮名表記

第一節 消息における資料としての有効性

性

## 第二節 豊臣秀吉の消息における特殊音

### 素の仮名表記

## 第三節 伊達政宗の消息における特殊音

### 素の仮名表記

## 第四章 軍記物語における特殊音素の仮名

### 表記

## 第五章 室町時代末期の音韻と表記

### 第一節 室町時代末期の促音

### 第二節 室町時代末期の撥音

### 別表1〜41

### 参考文献

## 三 それぞれの章の内容

### 〈第一章〉

本章は「総論」というべき章であるが、まず第一節で室町時代末期（天正・文禄・慶長）という時代区分を設定した理由を説明している。これについては橋本進吉、大友信一氏などの先学の定説といつてよい説を継承している。著者は先学の時代区分を肯定するところから出発しているが、この室町時代末期にこそ自分が抱く問題意識が隠されているとして、次のように述べている。

「促音」「撥音」の音韻については、

室町時代にそれぞれ一つの音韻として確立したと言われているが、そのことを背景として、室町時代末期に、様々な位相における日本語の仮名表記にそのことがどのように反映されていたのかということは、まだ十分に解明されているとは言い難い。

そこで、本稿では、それらの特殊音素が日本語の中にとり込まれ、室町時代に一つの音韻として確立したことを背景として、室町時代末期にそれらの特殊音素がどのように平仮名で表記されるようになっていったかということを実証的に明らかにすることを課題とする。（二二頁一九行〜二三頁六行）

ここで著者の問題意識ならびに本書の課題が明確に記されている。室町時代に一つの音素として確立したとされる「促音」「撥音」について、平仮名で表記されるようになった過程を実証的に論証していくというものである。

次いで、平安時代以降の音便の発生と表記の変遷を「鎌倉後期に至って」「ツ」による表記が一般化し、撥音と促音の表記を撥音は「ン」で促音は「ツ」で表記するとい

う別種の表記法が次第に定着した」とする小林芳規博士の説を紹介しつつ、室町時代の字書類と仮名遣書の特殊音素の表記を検討する。

室町時代中期と末期における撥音・促音表記の相違について、次のような方法によつて著者は実証しようとして試みている。一つは室町時代を象徴する字書類による表記から検討を加え、もう一つは『仮名文字遣』（定家の『下官集』を大幅に増補した仮名遣いの規範を示した書）である。

「アマサへ（剩へ）」「ウタへ（訴へ）」「モトモ（最も）」「モテ（以）」「ヨテ（仍）」の五語が検討の対象になっている。これらの語は本書で扱っている前期版及び中谷本『どちりいなきりしたん』において、促音が無表記の語群である。

結論から言うと、著者はそれぞれの語について五種から十四種の辞書類の画像を提示し、「室町時代中期に書写されたものは」「無表記が一般的であったようである」と指摘する。また室町時代末期になると「ほぼ促音に」「ツ」表記がなされるようになっていく（二一九ページ四〜八行）として、室町時代の中期と末期の表記に現れた

相違を指摘している。

『仮名文字遣』では、室町時代中期から末期にかけての九本について右の語群と共通する「あまさへ」「うたへて」の二語を検討している。「あまさへ」は九本とも促音便は無表記であり、「うたへて」は明応四年（一四五九）の識語を持つ写本のみ川の草体である「ツ」が表記されているが、掲載語のない一本を除き他は無表記である。室町時代末期の字書類における表記と『仮文字遣』の表記との相違について、著者は人為的な規範意識と実用的な表記意識が混在していたためとする（三七頁一九行）

第二節では先行研究を整理し、撥音便、促音便を中心に、表記との関係を展望している。室町時代語の研究にキリシタン資料は重要な文献であり、特殊音素の表記の嚆矢としてキリシタン資料の検討から始められている。ロドリゲス『日本大文典』では同じ子音を重ねる表記と、*o* のように異なる子音の文字を重ねた促音表記があったとし、*t* 入声についても *o* *o* は *o* *o* であり、現今のツの音と同一であるとする橋本進吉の説を紹介している。

『伊曾保物語』の促音、*t* 入声音に関する井上章の研究、『貴理師端往来』の促音などを研究した土井忠生、菅原範夫らの研究などの紹介もある。次いで迫野虔徳、菅原範夫らの書状や古文書、古記録、軍記や狂言台本における促音の表記に関する研究を詳細に整理、紹介している。迫野は「上杉輝虎書名消息手本」で付されているふりがなについて、促音、入声には「ツ」、開音節には「つ」が用いられているとする。菅原は軍記物語を調査し、「徒」「津」「つ」「川」「ツ」が用いられ、「川」「ツ」が促音、入声音でも用いられ、とくに「ツ」は開音節の語頭には全く用いられず、促音、入声音に非常に多く用いられているとする。

『天正狂言本』についての迫野の説、「つ」「徒」は開音節であり、「ツ」は促音に使われているとし、また撥音「ん」と促音「ツ」の表記が錯綜していることなどを紹介している。

第三項は「ん」と「ツ」の混用を中心に、「ンツ」「ンチ」で促音が表記されたとする遠藤邦基らの説が紹介されている。さらに促音、*t* 入声が「ツ」で表記されるよ

うになった流れについて、菅原範夫が「謡い物」に中心があったとする説を立てているのに対し、迫野虔徳は中世末、近世初期には一般的な表記方式であったとする説を立てているが、著者は迫野説に共感している。

#### 〈第二章〉

この章においては、書簡を集めて習字手本とした往来物の一種である『貴理師端往来』、キリスト教教義書である『どちりなきりしたん』、折禱文や教義を集め手引書とした『おらしよの翻訳』の三種を対象としたことについて説明し、それぞれにおける特殊音素の表記を丹念に調査している。

『貴理師端往来』（二五六八以前の成立）は写本であり、漢字の右側に振り仮名として平仮名が付されている。漢語の促音二例は「ツ」、*t* 入声一〇例は「ツ」、和語の促音四例は「ツ」、和語の開音節は十一例が「つ」、二例に「ツ」が用いられている。語中・語尾の促音・*t* 入声・開音節はいずれも「ツ」であり、語頭には「つ」が用いられているとする。「徒」「津」は用いられていない。撥音は漢語四四語、和語一語、本語三語すべてが「ん」で表記されている。

る。

『どちりいなきりしたん』は一五九二年刊のローマ字本とそれに対応する国字本があり、また国字本と内容をほぼ同じくする中谷本がある。これらは前期版とされ、一六〇〇年刊の「い」を抜いた形で呼ばれる『どちりなきりしたん』も同様にローマ字本と国字本があり、後期版と呼ばれる。ローマ字本と国字本は内容的にもほぼ同じであり表記を比較するのには好都合である。

前期版では「つ」「徒」の二種が使われ、中谷本では「つ」「徒」「川」の三種が使われている。促音とt入声については「つ」のみが使われ、「徒」は使われていない。

国字本では「tçu」は五四九例あり、すべて和語、「tu」「tv」は五一例あり、すべて本語、「tçu」の七例はすべて漢語と指摘する。

後期版においては、「川」「つ」「徒」「津」の四種が使われている。ローマ字本における同じ子音を重ねる「ce」（悪口など漢語七語）、「ji」（一切・達するの二語）、「pp」（日本など六語）、「t」（あって・一体など一六語）などが実証的に示され、ローマ字本の促音表記にゆれはなく、国字本では

無表記であったり、「ウ」と「ツ」の混用があると指摘する。結論的には、促音・t入声には「川」「つ」が用いられ、「津」は二段活用、「徒」は語頭が八四%と高い数値を示している。これらの研究から、著者が主張するこの時代における促音・t入声のモーラ（拍）認識の確立が首肯できるように思われる。

撥音についてはどうか。前期版ではローマ字本で「n」で表記された例が「m」で表記された例より圧倒的に多く、国字本では「ん」で表記された例が「む」より圧倒的に多いことが例証されている。後期版では「ん」で統一され、「む」が混用されることはなく、ローマ字本、国字本ともに無表記はないと結論付けられている。

### 〈第三章〉

豊臣秀吉自筆の消息において、〈つ〉の表記の仮名は、「つ」「川」「ツ」「徒」の四種が用いられ、「徒」が六割以上の例で使用されている。但し「徒」が促音で用いられていることは少なく、和語、漢語ともに語頭が多いとする。「ツ」は助数詞の使用例が多い。専修大学図書館蔵『源氏物語のおこり』は秀吉自筆とされているが、消息

で和語の語頭の〈つ〉に「徒」が多く用いられているのに対し、「徒」は一例にとどまり、秀吉自筆に疑いが残るとしている。

伊達政宗の消息では促音・t入声では「ツ」が用いられているが、天正・文禄年間のものに多く、慶長になると「つ」が多くなるという。「徒」は和語で用いられることが多く、〈つ〉全体の二割ほどになる。「川」「津」は一例ずつしかなく、ほとんど用いられていない。片仮名の字体に近い「ツ」は助数詞としての用法が多い。「つ」は五割以上の語の表記として用いられている。使用の傾向として「徒」は語頭、「ツ」は語中・語尾、「つ」はほとんどが語中で使用されている。撥音は「ん」が用いられ、混乱はないとする。

### 〈第四章〉

『大かうさまくんきのうち』では〈つ〉は和語では「川」が用いられ、促音・t入声としては「ツ」が多く用いられている。「徒」「津」はすべて和語の表記で使用され、「つ」は和語で用いられている。これらの例から「ツ」は促音・t入声は「ツ」、和語の開音節は「徒」「津」「つ」が使われている。「徒」は語頭の例が多い。「つ」は

語中での使用が多い。「津」の使用例は少なく、語中・語尾では「川」「ツ」が用いられている。撥音は基本的には「ん」で表記され、「む」の例も散見するという。但し、撥音と促音の「ん」と「ツ」の混用された例はなく、著者の太田牛一は撥音と促音の聞き分け、書き分けが出来る力があつたと著者は断言する。

#### 〈第五章〉

第二章・第三章・第四章は室町時代末期の資料、とくにキリシタン資料や豊臣秀吉、伊達政宗の消息に見る表記と音韻の關係が詳細に論じられているが、本章ではそれらの総括というべき整理がなされている。

著者は「日本語の音節構造が室町時代末までにシラビーム構造からモーラ構造へと転換を遂げていた」こと、そのために促音は1モーラとして認識されるようになり、「他の開音節と同様の等時間が与えられ、その部分を一つの平仮名で表記して等時間を確保しようする意識が生じた(三七六ページ―三行)」という明確な見解を始めに提示している。これはこの時期にキリシタン資料というローマ字表記が残されていることが大きい。しかし著者はそのことだ

けに頼るのではなく、『實理師端往来』や後期版の国字本における振り仮名を詳細に検討し、(つ)の表記について、『仮名文字遣』の慣用的な無表記から1モーラを表す表記意識が定着したとする。

著者がキリシタン資料を中心に促音・t入声、撥音と表記との關係を別表に掲載しているように、丹念に整理している緻密さには敬意を表するものであり、本書によって室町時代末期の促音便・t入声、撥音便の表記と音韻の關係はほぼ明らかにされたといえるように思われる。ただし、未解明の問題もまだ多く残されてもいるし、そのことは著者自身もこの第五章で触れている。

t入声の部分に「川」または「ツ」(川の草体)をあてていることに關しては、おそらく漢籍や仏典などにおいて、片仮名によって振り仮名を記す際にt入声にあたる部分を「ツ」で表記したことに由来するのではないかと推測される。(三八七ページ―四行)

語中のt入声が「つ」で表記されるようになった理由としては、語中にあるt入声を、閉音節として発音すること

が、開音節に比べて母音を伴わないために安定性を欠き、日常会話では非常に発音しにくかったために、日本語の音節がモーラ化したことと關係して、実際の発音においては「[tʃu]」に近い形で発音されるようになったからではないかと思われる。そのため、語尾であればt入声を表す「川」で表記されるのに対して、語中の場合はそのがなされずに「つ」で表記したものと推察される。(三八七ページ一八行―三八八ページ五行)

当時においては、まだ、t入声が開音節化していく途上であり、完全な開音節化はそれ以後の江戸時代になってからすすんだものと推定できる。また、t入声字体による書き分けにおいては、語尾のt入声は促音と同様に主として「川」「ツ」が用いられており、「徒」「津」は用いられていなかったことから、音韻としての促音とt入声は、当時において非常に近いものと考えられていたことが推測される。(三八八ページ五―九行)

促音とt入声との關係、それらが「川」

「ツ」あるいは「つ」で表記されるようになったことについては「推測」「推察」の段階にとどまっている。ギリシタン資料以外の資料で音韻と表記の実態を明らかにすることは、多くの困難な問題があることは承知しているが、右に掲げた事項は、著者が自らに課した課題ともいえよう。今後の解明に期待したい。

本書は二〇〇八年九月に立教大学より博士号を授与された論文が基になっている。

(二〇一二年二月二五日発行 おうふう

A5判 四四四ページ 一五、〇〇〇円＋  
税)

(なかやまろくろう 作新学院大学教授)